

四、文化活動の新展開

新しい文化の芽生え

終戦により人々は精神的な束縛から解放された。人々の自由な心は、文化的なものを求めるようになった。まず、敗戦をどうとらえ、新しい文化をどう創造していくかという、より本質的な問題が存在していた。各新聞は、一斉に「文化国家論」を提唱して各界の意見を掲載した。次にその幾つかを挙げよう。

何よりもこの度の敗戦を三省し四省する要があるのではなからうか。文化といひ、文学というもののは決して民族、もしくは生活から分離してあるものではない。つまり日本民族がアングロサクソン族との戦ひに敗けたということは日本の現代文化が米のものに敗けたことに他ならない。戦争の面では彼我の規模の大きさ、相違に格段の差があったといはれるが、文化の方面からもそれが言えるのではなからうか。これから生れでる文学は単に日本民族という独善的なものでなく世界に冠たり得る科学と文学とが渾然一体となった真に新しきものであらねばならぬと思ふ。(作家 庄司 清 談)

〔北日本新聞「昭和二〇・八・二七」〕

聖断一度下って祖国日本は一切の過去を抛ち、新日本の再建に邁進すべき運命に立ち到った。抑々今次敗戦の最終の原因が、原子爆弾の出現、ソ連の参戦に帰するとしても、国民一般の教養の低劣に起因する道義の頹廢もまたその大きな要素であったことは、畏くも首相宮殿下が明白に指摘され給ふた所である。しかも、この事を深く考察すれば、過去に於ける日本国民の精神生活の基礎に、豊饒にして逞しき情操が普く与へられてゐなかつたためである。(中略)斯くて芸術の振興は再建日本にとっては国の内外両面に対する緊急かつ根本的要務である。しかも諸芸術の中で人種、言語の別を越え、概念の領域を超越して直載に人間の本能に訴え、和親相愛の心情を昂め、崇高純美の気魄を培ひ得る力を最も大きく内包するものは音楽芸術で

あるといへよう。

この音楽特有の力は貧富貴賤、無智有識の別なく、敗戦直後の矯激なる感情の鎮静は勿論、今後起こり得べきあらゆる困苦欠乏にたへ得る逞しく豊かな再建的精神培養に非常なる力を發揮し得るであらう。

更にまた幾多の危惧疑心を抱いて進駐する連合国軍をして日本国民の平和愛好の真意を理解せしめ得るであらう。(後略)

(福井直秋＝筆者は武蔵野音楽学校長 中新川郡宮川村の出身で当時滑川町田中に疎開)

〔再建日本と音楽〕と題して「北日本新聞」昭和二〇・九・九～一〇に連載

最近迄は、純粹な芸術は、生活上余計な存在の如く扱はれ勝であつた。これは常識化されやうと迄していた。心の糧を取りあげられた人々は、八百屋の配給を毎日氣にして暮らすやうになつた。主人も主婦も、食糧品の話題が社交上新鮮な魅力をもつて登場した。人々の生活は美を失つた。恐ろしい生存競争心理が支配的にならうとしてゐた。

月光は黒雲に包まれて光りを消した。斯くて人々は闇の世界に日夜獲物を狙つて暮すやうになつた。

此有様を救ふものは芸術でなければならない。文学、美術、音楽、彼等の生活に復活の泉となるものは芸術である。文化の諸問題のうち芸術に関する問題こそは最も急を要する事項であらう。荒涼とした人々の胸に、清澄の音律の流れは、心に慰樂を与へる筈である。美しい色彩の魅惑は、荒廢した居室に一線の光りを放つであらう。(中略) 茲に必要なものは、美術館の建設である。各都市各県では必ず近代美術館を所有すべきだと思ふ。建物は工場の不用建築物を利用して、急設の美術館を置くことだ。其処には郷土の美術品は勿論、日本近代の美術品を陳列して、後学の為の指導標とする。遊覽者の為に慰樂と同時に知識を与へる。蒐集家の藏品も開放してもらつて、文化史的に陳列するとか、いろいろ考へはあると思ふ。(後略)

(織田一鷹＝筆者は画家、文展無鑑査、現在福野町に疎開)

〔美術館建設の提唱〕と題して「北日本新聞」昭和二〇・九・二四の文化欄に収載

やがて、各種の文化団体が一斉に活動を開始した。昭和二十年十月に結成された「高岡文化協会」をはじめ、「中新文化連盟」「小杉文化倶楽部」など、地域的な団体がスタートした。名称に〇〇文化連盟とか、〇〇文化協会などと「文化」の二文字を冠することが流行した。これらの団体は親ぼく会的性格が強かったが、この時期には講演会を開

第67表 終戦直後に設立された文化団体—設立順、婦人会・青年団は除く—

名 称	結成時	場 所	主 な 活 動
疎開文化人懇談会	20. 10	小 杉	
高岡文化協会	20. 10	高 岡	座談会(翁)、雑誌刊行
中新文化連盟	20. 10	上 市	翁、梅原ら
高 志 塾	20. 10		講演会(梅原ら)
富山水曜会	20. 11	富 山	〃 (高木)
小杉文化倶楽部	20. 11	小 杉	老田町長、野上図書館長
北陸詩人会	20. 12	小 金	『日本海』の刊行
富山県芸能協会	20. 12	富 山	演芸会、巡回芸能隊、増産脚本募集
富山県文化人連盟	21. 1	富 山	新日本文化講演会(翁ら)
加越能青年文化連盟	21. 2	富 山	弁論大会、民主大学講座、雑誌刊行、音楽会
わらんべ会	21. 2		志麻ら、子供会
金山文化会	21. 2	金 山	講演会(岩倉)
射水文化会	21. 2	小 杉	
馬鬣倶楽部	復活 21. 4	泊 山	文化講座
富山県童話連盟	21. 4	富 山	志麻ら
富山文化クラブ	21. 4	富 山	コンサート(柏木、八十島)
高岡文人会	21. 4	高 岡	越中万葉講座
富山叢声楽苑	21. 5	富 山	合唱団、小沢主宰
富山友の会	復活 21. 5	富 山	婦人の友講読者のグループ
古志倶楽部	21. 5	富 山	芸能祭
滑川町新生活懇談会	21. 5	滑 川	
あこがれ会	21. 5	尾 岡	文芸評、町民講座
月岡文化会	21. 5	月 岡	講座
日本民芸協会富山支部	復活 21. 5	富 山	民芸展覧会
高岡童話の会	21. 6	高 岡	
富山県美術文化協会	21. 6	富 山	
スバル文化会	復活 21. 6	富 山	広田ら音楽会
春秋クラブ	21. 6	富 山	
富山文化協会	21. 7	富 山	中田
富山演劇協会	21. 7	富 山	八十島ら慰問巡業
砺波音楽協会	21. 7	砺 波	
富山民主文化協会	21. 8	富 山	ソビエト音楽・文化の普及、演劇
上條文化会	21. 8	中新上條	講演会、演芸会
仏教青年会	21. 8	婦負長岡	
氷見童話会	21. 8	氷 見	広島戦災死児追悼
伏木文化協会	21. 8	伏 木	レコードコンサート、演劇
越南美術協会	21. 8		
新湊芸能文化協会	21. 9	新 湊	
福光文化懇談会	21. 8	福 光	レコードコンサート
青年文化会	21. 9	魚 津	
向 上 会		高 岡	禅研究
石動文化会	21. 11	石 動	俳句の会
富山映画研究会		富 山	

(「北日本新聞」の記事を中心に、その他の資料で補足、補正した)

くなど、啓蒙的な活動を行うものも多かった。続いて、「北陸詩人会」「わらんべ会」「富山叢声楽苑」「富山演劇協会」など文芸各部門の団体が復活または創立された。これら文化諸団体の数は新聞紙上に報じられただけでも、昭和二十年に八団体、二十一年には三十五団体に上った。

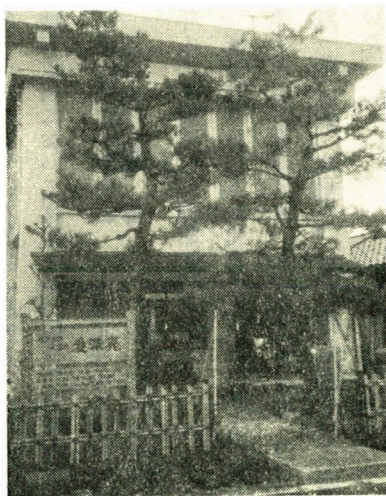
また、広く県下の文化人を結集するため、昭和二十一年一月、「富山県文化人連盟」が結成された。これは、その前年の十一月、中央、地方の全文化人を結集して「日本文化人連盟」が結成されたが、その地方活動の第一歩として結成されたものである。発起人の代表は戦前から幅広い文化活動を展開していた高志人杜主宰の翁久允で、ほかに高木友三郎、中田法寿、三浦孝之助、村秀三、中山輝らが結成の準備をした。

結成式当日は、中央の日本文化人連盟から委員長の杉森孝次郎と秋沢修二が来県、結成式後、両氏が講演を行った。演題は、秋沢修二が「民主主義革命と文化」、杉森孝次郎が「我が民主主義化運動の指導理念」であった。なお、翁らが発刊している雑誌『高志人』の昭和二十一年三月号誌上に同連盟の「結成趣意書」を収録したが、その中で、地方政治において文化人が指導性を発揮することの必要性を強調した(『富山県史』史料編。現代一四二頁)。

疎開文化人と その影響

終戦直後の日本では、文化の地方への拡散とも言える状況が進行していた。その現れとして、東京などから疎開してきた文化人の活動や、移動文化講座と称して中央の学者や文化人を呼んでの講演会が頻繁に開かれた。

富山県における疎開文化人の双へきは、福光町に疎開していた版画家の棟方志功と八尾町に身を寄せた歌人の吉井勇である。そのほか、福井直秋(音楽家・滑川町へ疎開)、織田一磨(画家・福野町)、松本謙三(宝生流能楽師・井波町)、乾誠一郎(画家・中田町)、鷹田其石(画家・三日市町)、保坂益朶(女流ギター奏者・上市町)、伊藤四郎(洋画家・城端町)らが出た。



棟方志功記念館「愛染苑」 昭和57年4月、
福光町に設置された。志功が疎開中に制作
した作品を中心に収蔵、展示されている。

また、疎開とは言えないが、報知新聞富山支局長として大正十三年（一九二四）に来富した俳人の前田普羅は、終戦を疎開先の津沢町で迎え、その後、作句活動を行い、俳壇選者、同人誌編者としても活躍した。高岡出身の作曲家、室崎琴月は終戦を契機に郷里へ帰り、創作活動に打ち込んだ。

棟方志功（一九〇三—一九七五）は、昭和二十年四月、妻子とともに西砺波郡福光町の光徳寺に疎開し、二十六年までこの地で創作活動を行った。富山で画業を続けるに当たっ

ては多くの有志が協力をかって出、棟方もまた在県中に精力的な活動を行った。二十一年三月からは北日本新聞文化欄にカットを提供し、随筆も寄せている。また、高岡市文化部から文化講演会の講師を依頼されたり、富山市の復興計画立案に際して意見を求められたりした。第一回日展に出品して岡田賞を受賞した「鐘溪板画巻」、後にスイスのルガノ国際版画展で優秀賞を受けた「女人観世音板画柵」などが在県中の代表作である。棟方を慕って教えをこうた県人も少なくなかった。金守世士夫は、棟方の代ずりを経験することによって、版画家への志を固めたと述懐している（文化出版局『季刊銀花』二六号）。

富山県美術展（県展）が、戦後いち早く、昭和二十一年に開かれるようになったのも、杉山司七、織田一麿、棟方志功ら疎開中の作家や美術関係者に負うところが大きかった。

吉井勇（一八八六—一九六〇）は、昭和二十年二月、戦局が悪化し大都市からの疎開が始まったので、妻を伴い大雪の

中を京都から婦負郡八尾町に疎開した。同年十月に帰洛するまで宮田旅館、常松寺、小谷恵太郎宅と転々としながら不如意な疎開生活を送った。その間に詠まれた歌数は六五〇首を超え、歌集『寒行』の末尾にその一部を載せるほか、すべてを『流離抄』に収めている。勇は後年この歌集に触れて「自分の歌風にもひとつの転機を画したものと述べているが、次のような流離の身の落ばく感を歌ったものが多い。

たたかひに荒みはてたる人ごころ寂しとおもへ春は来にけり

あはれなる流離のわれや欠碗のにぎり酒にも舌鼓打つ

また、富山の地を仲だちとして、棟方志功と吉井勇のかかわりが生れているのも興味深いことである。棟方は吉井が疎開先の八尾町で「屏風には志功板画の諸天ゐて紙漉く家の炉火はなつかし」という歌を作っていたことを後に知り、吉井の『流離抄』を板画にしたいと申し出たのであった。二十九年、その作品は『流離抄板画卷』となって刊行されたが、その巻末には吉井の「流離抄について」の一文が載っている。

ホトギス派の俳人として知られる前田普羅（二八五―一九五四）は関東大震災に遭い、翌大正十三年（一九二四）、報知新聞富山支局長として来県、昭和四年、俳誌『辛夷』を創刊した。昭和二十年、富山空襲で焼け出され、西砺波郡津沢町へ移ったが、ここで三たび類焼の難にあっている。この間『辛夷』は号を重ね、全国に同志の輪を広げた。

作曲家で、東京中央音楽学校長であった室崎琴月は、昭和二十年五月、郷里の高岡に疎開し、終戦後、市内木舟町に居を構えた。終戦直後、家庭生活に音楽を取り入れることを呼びかけ、文化運動の良き相談役となった。また、新発足、再出発する学校のための校歌の作曲も多い。さらに、戦後いち早く文化都市建設を目指した高岡市の要請に応じて高岡市民の歌の作曲をし、市民合唱団の組織、指導の中心ともなって活動した。二十二年は東京中央音楽学校創立三十年の年に当たっていたが、当時、同校は戦災で焼失、閉鎖状態にあった。このため、室崎は高岡での再建を図

り、小沢慎一郎、大沢欽治ら地元音楽家の協力を得て、市内の学校や楽器店に分教室を置くという変則的な形ながら、同年十一月、公認音楽学校の開校にこぎつけた。その後、娘の室崎信子がこれを受け継ぎ県内での音楽教育は続けられた。

移動文化講座

昭和二十一年（一九四六）から二十二年にかけて、中央の学者や文化人を招いての文化講座や音楽家による演奏会が盛んに開かれた。名称は「民主大学」とか「移動文化講座」「夏期移動講座」などと様々であるが、いずれも地方文化の啓蒙をねらったものであった。これらの文化講座を主催したのは各地の文化団体であったが、その中で加越能青年文化連盟の活動はひととき目立っていた。

加越能青年文化連盟は、昭和二十一年三月当時、早稲田大学学生の逸見俊吾（石動町出身）が中心となって結成した青年の文化サークルであった。逸見は、各種の催しを開くため、自治体や新聞社の後援を求めて東奔西走した。当時、高岡市では文化部を新設して文化活動を推進しようとしていた矢先であったので、高岡市の全面的な協力を得て会の活動は軌道に乗り出した。会場としては市の中央にあって鉄筋の体育館を持つ川原国民学校が多く使われ、東京などから講師を招いて講演会を行ったり、音楽会を催したりした。また、富山市では、県会議場を借用して同様の催しを行った。高岡・富山両市ともいつも満員の盛況であった。

加越能青年文化連盟は、富山、高岡のほか八尾、出町、魚津などに支部をつくり、講師を順次移動させて講演会を催した。当時講師として来県した主な文化人は、武者小路実篤、横田喜三郎、我妻栄、大河内一男、美濃部亮吉、原信子、諏訪根自子、南原繁、大内兵衛などそうそうたる人々であった。また、昭和二十二年夏、東大経済学部夏期移動講座を富山県と共催で、富山市の神通中学校で開催した。経済学部の人ほとんどすべての教授が、東大の講義題目で大体一人が六時間ずつ講義し、その総講義時間は八十時間に及んだ。受講料は全時間で一五〇円であった。会場の神



諏訪根自子を囲んで 加越能青年文化連盟主催のリサイクルを終えての記念撮影。(高岡市役所提供)

通中学講堂は、夏休みで帰省中の大学生たちに知識欲に燃えた老人や婦人も混じり、連日満員であった。富山県は警察官二十人を受講させた。大学の学部全スタッフが文字通り富山に移動してきて、富山県民の前で大学の講義を行ったのは、空前絶後のことであった。しかし、その後、逸見が東京へ去り、連盟の活動は立ち消えとなった。

なお、昭和二十二年の夏には海の夏期大学及び夏期農業大学の二つの夏期大学も開催された。海の夏期大学は、氷見郡阿尾区域校長会が主催して氷見郡女良村で開かれた(二泊三日)。内容は氷見海岸の植物、動物、地質などに関し、帝国大学の槇山次郎教授をはじめとする七人の講師が指導した。一方、夏期農業大学は、富山県農業者会らが主催し、東畑精一ら八人の講師で二日間開かれた。

新聞・放送

昭和二十年九月、連合国軍総司令部によって、「言論及新聞の自由に関する覚書」及び「新聞言論の自由に関する追加措置」が発せられた。なかでも、後者は、「日本国政府は直ちに新聞及び通信の自由に対する平時並びに戦時に於ける制限諸法令施行の手続を即時無効ならしむる処置をとること」と命じたので、これにより新聞紙法をはじめとする一連の関係諸法令が撤廃されることになった。

当時、富山県内の日刊紙は、戦時中の統合により「北日本新聞」

一紙のみが刊行されていた。同紙は戦災により社屋が全焼したにもかかわらず、疎開先の中新川郡新川村寺田（現立山町寺田）の仮工場で印刷し、一日も休まず刊行を続けた。

二十年十月、「新聞非常態勢暫定措置要綱」が廃止され、それまで発行が停止されていた中央紙の地方版の発行が解禁となり、さらに十一月には「新聞の併読禁止」も解除された。これらの措置によって、全国的に新しい新聞の創刊がみられたが、富山県では、二十一年三月十一日に「富山新聞」、同年六月十五日に夕刊専門紙「北陸夕刊」がそれぞれ発刊された。



新聞社の刊行物（富山県立図書館蔵）

一方、新聞の用紙事情は悪化の一途をたどり、北日本新聞では二十一年十二月から週一回、タブロイド版で発行することになった。さらに、二十二年三月からは児童教科書用に新聞用紙を提供することが日本新聞協会で決められ、タブロイド版の発行が週二回となった。二十三年になって用紙事情が好転し、タブロイド版の発行がなくなり、やがて、ページだても二ページから四ページへと増加した。

このころから各新聞社が行う事業や催しも活発化していった。北日本新聞社は、二十三年四月に新聞週間、同年五月に青少年少女記者の採用、二十四年の九月二十日から婦人と子供博覧会などの行事を行った。また、二十五年以降、月刊の『月刊北日本』『農業北日本』、週刊の『婦人北日本』『北日本少年新聞』などを相次いで刊行した。富山新聞は、二十四年、発刊三周年を記念して富山新聞文化賞を制定、また二十八年には本社をこれま

での高岡から富山へ進出させ、取材活動及び文化活動を一段と活発に展開した。

昭和二十六年五月には、新聞、出版用紙の統制が撤廃された。これによって新聞に
関する統制はすべて除かれ、以後、各社はそれぞれ積極的な販売策を進めることにな
った。

ラジオの戦時放送は、昭和二十年八月十五日の終戦の詔書の放送によって終わり、
十七日には天気予報の放送が復活した。しかし、放送も連合軍の指導管理の下で行わ
れることとなり、前述のような総司令部の一連の指令によって、まず民主化の方向が
明らかにされた。

放送の民主化によって番組も改革され、聴取者の声が広く放送に取り入れられるよ
うになった。二十年九月には、聴取者の投書を発表する番組「建設の声」(のちの「私た
ちのことば」)、次いで聴取者の生の声を電波に乗せる「街頭録音」が始まった。

放送の時間が延長され、二十年十一月から全日放送が実施された。それまでの放送
は、放送時間が一日、十二時間くらいで、適宜、休止時間が設けられていたが、この
改革によって聴取者がいつでも聞ける放送の体制がとられた。

富山放送局は、戦災時、焼失を免れたものの機器類の大半が被害を受け、放送
が不能になった。しかし、技術関係者の必死の努力により、数日にして復旧し、放送
を再開することができた。昭和二十三年一月には、富山第二放送が放送を開始し、二
十四年一月には、県内のラジオ受信者数は十万人を超え、普及率は全国上位を占める

第四節 民主的改革期の教育・文化

第68表 ラジオの放送番組

けふのラジオ	
朝 ▲五、〇〇時報、報道、天 気豫報 ▲五、〇〇備録 ▲六、〇〇 時報、報道、天気豫報 ▲六、五〇 備録 ▲七、〇〇時報、報道、天気 豫報、番組預告 ▲一、〇〇時報 週間録 ▲一、五〇天気豫報	晝 ▲正午時報、報道 ▲一、 五〇マンドリン合奏 ▲一、〇〇課 員演劇安齋喜劇川柳馬場松井田 より中継 ▲三、〇〇時報△録 所の時間(「新音楽」) ▲五、〇時 報、報道
夜 ▲六、〇〇時報△少國民の 時間△シンフ△お話と音楽「ヤ まびこ」県民放送協賛劇、作曲 指揮田中一、話「おいらん グリ」前田松 ▲七、五〇天気豫 報、番組預告 ▲七、〇〇時報、報 道△浪花節一題、慶徳虎造、松平 國十郎 ▲九、〇〇時報、報道、天 気豫報、番組預告、實用英語習 習録、杉山ハリス、西内放送員	第二放送番組 ▲六、〇〇時報、名曲披露 ▲六、 五〇天気豫報、番組預告 ▲七、〇 〇時報、報道、歌曲

(「北日本新聞」昭和20年9月30日付新聞記事による)



街頭録音 大衆にマイクが開放され、街頭録音が盛んに行われた。昭和21年7月、富山市西別院前広場。（NHK富山放送局提供）

に至った。

二十五年五月には、「放送法」「電波法」「電波監理委員会設置法」のいわゆる電波三法が公布された。そして、社団法人日本放送協会は、新たに放送を公共の利益のために行うことを目的とする特殊法人日本放送協会として新発足した。他方、広告放送を目的とした民営の商業放送の事業も新たに設立が認められることになり、各地で設立の準備が始められた。

富山県下のラジオ聴取加入状況

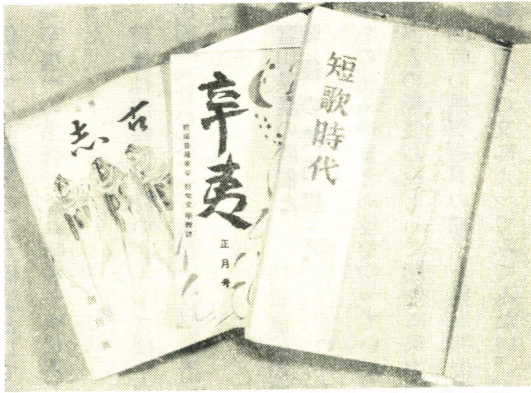
は、戦前の最高が八万六三一〇件であったが、戦災で約一万六〇〇〇台のラジオを失い、二十三年五月になってようやく戦前の数に復した（『北日本年鑑』昭和二十三年版）。二十四年一月、富山での第二放送の開始に促されてさらに増加し、四月には十万件を突破し、二十五年三月末には、一万一千八百七一件で、普及率五八・三％、二世帯に一台の割で普及した。

出版の活発化 と文芸活動

出版は、言論の自由が与えられたことにより活発となった。長い間活字に飢えていた人々は、書店の店頭に出た本や雑誌に殺到した。雑誌は特に人気があり、昭和二十一年（一九四六）

六月までに、『新日本』『文芸春秋』『新生』『中央公論』『改造』『世界』『人民評論』など約九十種に及ぶ総合雑誌が相次いで創刊あるいは復刊された。また、二十一年五月に創刊された『リーダーズ・ダイジェスト』の日本語版は爆発的に売れ、発行部数で当時の雑誌界の首位を占めた。そのほか大衆娯楽雑誌の進出も著しかった。

このような出版の立ち直りとともに、富山県下でも文芸活動が盛んになり、各地で文化団体が結成され、機関誌、同人誌が発刊された。



戦後間もなく発刊された郷土関係文芸誌（富山県立図書館蔵）

総合雑誌的性格を持つものとしては、二十一年五月に創刊された『月刊富山』があったが、二十四年ごろ経営難で休刊した。翁久允が主宰する『高志人』は、昭和十一年に創刊され、戦時中、一時『高志』と改題しながら刊行を続け、戦後いち早く復刊された。

文学を愛好する同志が県下各地で会を持ち、同人誌の出版が相次いだ。それらは、『文学祭』（石動）『宴』（石動）『文燈』（高岡）『北陸文芸』（魚津）などであったが、いずれも経費倒れでやがて廃刊となった。

短歌では、二十一年八月、広川親義らによって『短歌時代』が創刊され、県下の主要歌人がその傘下に集まり、同人約五十人、社友約三百人を擁した。このほか、全県的なものとしては『ゆきぐに』『北陸沃野』があり、地域的なものとしては、『海潮』『氷見』『新樹』『福野』があった。また、療養施設の北陸荘で『若草』、同じく古里保養園で『高志路』が発刊され、堅実な歩みをみせた。

俳句では、県下の二大俳誌として前田普羅主宰の『辛夷』と金尾梅の門主宰の『古志』がある。この二誌のほか、『辛夷』の系統では『堅香子』(伏木)『喜見城』(魚津)があり、『古志』の系統では『都万麻』(氷見)『蓑毛』(出町)があった。

詩壇は活発で、詩のグループは十四、五を数え、同人誌も十種類ほど発刊された。主なものは『文学国土』『詩と民謡』『骨の火』『抒情詩』『詩人座』『昆虫針』などであった。また、萩野卓司、稗田董平、高島高らが詩集を刊行した。

富山県展の開催と戦後の美術界

終戦直後の富山県美術界は、疎開作家や帰郷作家も加わり、多彩な顔ぶれがそろっていた。帰郷作家の一人である杉山司七は、県から請われて内務部嘱託となっていたので、これら作家たちの連絡やまとめ役をやっていた。また、いち早く開催することになった富山県美術展(県展)についても、県と美術界との橋渡し役として開催に尽力することになった。

当時の県美術界の様子と県展開催までのいきさつを、富山県洋画連盟刊『富山県洋画連盟のあゆみ』に寄せられた杉山司七の文によってみてみたい。

「昭和二十一年一月八日、私は県の鈴木内務部長に会った。鈴木さんは私に内務部嘱託として美術行政を担当してくれといわれた。突然のことで面喰らったが、結局、引受けて、県庁各部署の業務と美術文化の関連を調査し、美術各界の先生方の協力を求めることとした。先づ、一月二十五日電氣ビルで日本画家懇談会を開いた。

その頃、日本画家の小坂勝人、紺谷英儀君等が毎日のように長島勝正君の家へ集って駄べっているうちに富山に美術センターが必要だということになり、私がそれを引受け、焼跡のバラック建に富山美術文化協会の看板をかけた。美術文化協会は先づ日本画の絹の配給やホワイト等資材頒布をはじめたが、互に制作に精進することが最高の目的であった。そうしているうちに遂に展覧会を開くことになった。



第一回県展を報じる記事
(「北日本新聞」昭21.6.16)

私は長島君と同行して県の社会教育課長に県展の開催を説いたが賛同を得られなかったので、思案の末、商工課へ廻って金山寛介課長に協力を乞い、美術文化協会と県との共同主催で美術展を開くということを承諾してもらった。全国各府県の美術展はみな教育委員会の管轄だが、富山県だけ二十年間も商工課が県展を運営してきたのはそのためである。」

こうして、第一回富山県総合美術展が開かれた。会場は二会場とし、二十一年五月二十七日から五日間高岡市商工奨励館、六月十四日から五日間は富山中学校で開催した。出品総数一二七点、審査員として織田一鷹、棟方志功らが活躍した。入場料は大人一円、小中学生は四十銭であったという。

第二回展以降しだいに出品点数も増え、隆盛に向かっていった。

芸能・音楽

演劇のサークルや研究会は、戦後、間もなく各地で起こり、やがて公演を行うようになっていった。

昭和二十一年(一九四六)には、四つの自立劇団が旗上げ公演を行っている。最も早かったのは、七月、新湊劇場で「漁民の街」を上演した新湊新劇研究会、続いて八月には、伏木文化会演劇部が伏木劇場で「喋る」「婦系図」を上演した。その後、十月、富山演劇協会が「熊」「国境の夜」「としつき」を富山座で、十二月、人間座(前身富山民主文化協会演劇研究会)が「白い花」「教員組合」を同じく富山座でそれぞれ上演した。やや遅れて、二十二年十二月に泊演



地方自立劇団の演劇公演 昭和22年9月、富山座で初公演した文芸座の「獅子」の一場面。（「文芸座1977」より）

劇研究会が「時の氏神」「水泥棒」を泊町亀子座で、二十三年九月には文芸座が「トラック島」「獅子」を富山座で初公演した。また、昭和二十二年には、富山放送劇団も設立された。

当時、一般には、これといって娯楽のない時代だったので、公演の入りは多く、各地で好評を博した。

伏木文化会を除く各劇団は、各地の小学校や公民館を借りて巡回公演を行った。特に、富山演協は創立以後二十四年までの四年間に二十五回もの公演を行い、遠くは利賀村の小学校の各分教場や結核療養所の古里保養園などで公演を行った。この劇団が最も得意としたのはチェーホフの「熊」で、八回も上演された。新湊の新劇研究会や泊演劇研究会の両地方劇団も、二十四年までに十二、三回の公演をこなし、周辺の町村をくまなく巡回した。

また、県庁、北陸銀行、不二越、興国人絹、呉羽紡績など職場の演劇部も活躍した。一方、旧制富山高校、薬学専門学校、師範学校などでもそれぞれ演劇部が結成された。中でも、旧制富山高校は、「第一の世界」など昭和二十一年十月、第一回公演を行った。そして翌二十二年には、これらの学校が集まって学生演劇連盟を創立し、公演を行ったが、学制改革で富山大学設置に伴い解散してしまった。

音楽関係では、昭和二十四年十一月にバリトンの中山悌一、箏曲の宮城道雄、十二月に日響室内楽団が来県したの

をはじめ、二十五年にも一流の楽団、音楽家が相次いで訪れ、本県の音楽界は空前の盛況を呈した。

とりわけ、二十五年四月の尾高尚忠指揮・日本交響楽団、六月の近衛秀麿指揮・東宝交響楽団の演奏会は県民にとっては初めての本格的なオーケストラによるベートーベン、チャイコフスキー、ドヴォルザークなどのプログラムで、県議場に集まった聴衆に深い感銘を与えた。

このほか、音楽家育成で有名な鈴木鎮一が来富したのを契機に才能教育富山県支部が結成され、以後、バイオリンやピアノに優れた少年少女が輩出することになった。

県下の合唱団として、昭和二十四年ごろ活躍していたものには、富山市を中心とした富山放送合唱団、富山叢声楽苑、高嶺楽友会(高嶺友の会)、高岡市を中心とした高岡市民合唱団、こだま会などがあつた。

このほかの音楽団体としては、スバル音楽協会、富山名曲愛好会、富山県音楽芸術振興会、高岡音楽研究会などがあつた。

宗教界の革新

昭和二十年(一九四五)十月四日、連合国軍総司令部は「政治的、社会的及宗教的自由ニ対スル制限除去ノ件」の覚書を発し、宗教の自由の確立についても政府に指示した。さらに、総司令部は、十二月十五日に「国家神道、神社神道ニ対スル政府ノ保証、支援、保全、監督並ニ弘布ノ廃止ニ関スル件」の覚書、いわゆる神道指令を発した。同月二十八日には宗教団体法が廃止され、宗教法人令が公布された。そして、二十一年十一月三日の日本国憲法の公布によって、政教の分離、宗教の自由が確立された。このような戦後の宗教の変革に伴い、県下の宗教界も変化した。

神道については、二十一年三月に、県は各地方事務所長あてに「国家神道ニ関スル連合国軍総司令部ノ指令ニ基ク措置ニ関スル件」の通牒を出し、神道の後援や支持、保全にかかわる県令や訓令の改廃、その他について管下への周



神道の保護廃止
〔「北日本新聞」昭20.12.29〕

知方を指示した(『富山県史』史料編、Ⅷ現代一四一三頁)。

そして、宗教法人令の定めにより、地方長官が保管する神社明細帳に記載されている神社は宗教法人とみなし、知事あてに宗教法人成立届けを提出させることとした。二十三年七月末の県下の神社数は、二〇九四であった。なお、二十一年二月に神社関係者によって神社本庁が設立され、その地方下部組織として富山県神社庁が発足した。

仏教界では、宗教法人令によって各派教団が自由に活動することが許されたので、独立派の傾向がみられた。しかし、浄土真宗が圧倒的な勢力を持つ富山県では、比較的平穏で、それぞれの寺院の復興に専心していた。

戦後、寺院は農地法、財産税法などの施行で、財産の優遇措置が絶たれたりして経済的に困窮するものが多かった。また、富山市では多くの寺院が戦災を被った。二十三年七月の調査によれば、戦災寺院は一二三で有力なだん信徒を持たない末寺の中には、そのまま再興できないものもあった。寺院経済の困窮を打開するため、保育所や幼稚園の経営をしたり、僧侶の中には学校や役場などに兼務するものも多くなった。

キリスト教界では、総司令部や海外諸教会の援助などから、伝道活動が活発になった。しかし、総曲輪教会など富山市内の教会が戦災で焼け、市内の信者たちは一時、新庄教会で合同の礼拝を行っていた。その後、二十二年十一月、二番町の富山教会に連合軍から供与を受けた資材で、かまぼこ型の会堂を建てて礼拝を行うようになった。ま

た、富山キリスト教青年会(YMCA)が設立され、活動を開始した。なお、戦前から宣教師として、また、青葉幼稚園の創設者として活躍したアームストロング(亜武巢^{あむす}マーガレット)は、戦後も重要な役割を果たした。彼女は、しばしば進駐軍と県民との間の折衝の仲介に入り、困難な問題を解決に導いた。戦災に遭った富山市の青葉幼稚園も二十四年三月に再建し、三十五年に没するまで幼児教育に全力を注いだ。

新しい宗教の動きも活発となった。戦前にあった新宗教は、終戦とともに復活して活動を開始し、分派、独立した。県下には、二十三年七月現在、神道系七団体の名がみられた。中でも、天津巨^{てんしきょ}(旧 大日教)の管長が富山県出身であり、県下に約百人の信徒がいたが、二十五年一月、極端な国家主義的教義とみなされ、解散を命じられた。

戦後は宗教団体が提携して宗教活動を展開する気運が高まった。二十三年四月には、富山県仏教会、県神社庁など県内の宗教関係団体によって富山県宗教連盟が結成された。